

東京産業遺産学会 (TIAS)

2024. 10. 8.

# ニューズレター

No.0166

## 行事予定

**12月15日(日) < 講演会「ドイツ蒸気機関車保存のふるさと****マイニンゲン工場を訪れて」 >**

時 間:13:30~15:30 会費:1,000 円 (資料代・入館料含む)

場 所:物流博物館 港区高輪 4-7-15 TEL 03-3280-1616

JR「品川」駅高輪口または京浜急行「品川」駅 徒歩7分

講 師:久保 健氏(日独協会会員)

※講演後に物流博物館学芸員による、企画展「鉄道古写真展—鈴木直利氏コレクションから」のギャラリートークも行います。

ドイツ各地で行われている蒸気機関車の整備は、「マイニンゲン蒸気機関車工場(Dampflokwerk Meiningen)」を中心に行われています。ドイツ鉄道の関連会社として、東ドイツ時代から維持されてきた技術や実績は、ドイツの蒸気機関車保存に欠かせない原動力と言えるでしょう。近年では蒸気機関車の新製まで行っている、当工場のあゆみや現状を通じ、蒸気機関車が保存される意義や課題をお話したいと思います。



## 報告 1 近代化遺産の保存と活用にかかわる最近の情勢について

講演者 小笠原永隆

日時 2024 年 2 月 24 日(土)

場所 東京都北区王子・北とびあ

### 1 近現代遺産の保存にかかわる最近の例

明治期より 150 年、大正期より 100 年をそれぞれ超え、終戦から 80 年を迎えようとする現在、各地で近現代遺産の保護にかかわる問題が多発している。

東京都港区の JR 東日本による高輪地区周辺の再開発地内では、1872 年の日本初の鉄道開業時における築堤跡が発見され、その後の発掘調査で非常に良好な状態で残存していることが確認された。日本の近代化の象徴ともいえる遺産であったが、結局は、わずかな部分だけが現地及び移築保存にとどまった。福岡県北九州市では、1891 年に開業した旧門司駅舎跡が検出されたが、多くの保存を求める声に反し、公共施設建設のために消え去ろうとしている。

兵庫県南あわじ市では、道の駅の建替工事に伴う発掘調査で、鳴門要塞の一部をなし、1899 年に建設した門崎砲台跡がほぼ完全な形で発見された。崩壊の恐れもあることから移築保存の方針となったが、鳴門海峡を通過して侵入する敵艦から大阪湾を防衛するための砲台であり、建設場所の意味が大きく、現地での修復保存が望まれたが叶わなかった。

綻した。戦前からの大メーカーはオークマ機だけである。工作機械業界の勢力図も大きく変わった。

以上、工作機械の概略史を述べさせていただいたが、百聞は一見にしかず、理解を深めるために、是非、工業技術博物館(図4)に足を運び実機を見てほしい。

参考文献 1)『JISハンドブック 13 工作機械 2019』、日本規格協会、2019-6

2)『日本の工作機械工業発達の過程』、日本工作機械工業会、1962

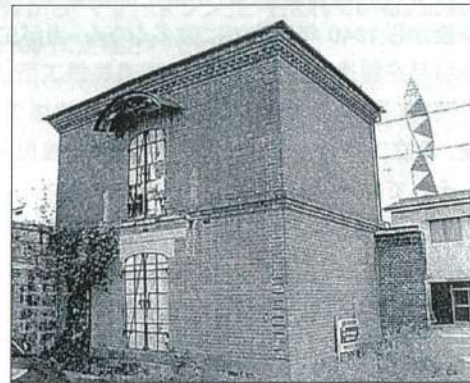
3)平柳恵著作『工作機械小史一年表で辿る工作機械の名機-』、私家版、2024-6-30

文:工作機械技術史研究家 平柳 恵作

## 茨城県水戸市の赤煉瓦建造物(2) 「塙家主信館」

茨城県水戸市の空襲は正に地獄であった。マリアナ基地を発進した167機のB29が水戸市街地を焦土化した。空襲は1945(昭和20)年8月2日午前2時31分から約1時間46分間も続いた。被害は、罹災戸数1万104戸、罹災人員5万605人、死者242人、重傷者144人、軽傷者1,149人、罹災戸数は全市戸数の約90%、罹災人員は全市人口の約80%に当たると記録されている。(総務省編「水戸市における戦災の状況」)

水戸市は県庁所在地のため官公庁・銀行など多くの赤煉瓦建造物が建っていたと見られるが、空襲被害のため残存していない。赤煉瓦造で残っていたのが、前回紹介した「少友幼稚園の教会堂」(東日本大震災で崩壊)と今回紹介する「塙家主信館」だけである。ともに煉瓦造の外壁だけが残り内部は焼失したと考えられる。戦後住めるように屋根を葺いたり、内部を木造で補修していたものと思われる。



塙家は水戸の商業の中心で大店が立ち並び金町通りで呉服店を営んでいた。塙家は水戸を代表する豪商であり、明治時代の当主は塙載(はなわ さい)で、家業だけでなく1873(明治6)年に銀行疑似会社であった常陸開産会社、1878(明治11)年に第百四国立銀行(常磐銀行を経て常陽銀行)設立に加わった。1889(明治22)年水戸線開通にも係わり、飯村丈三郎(新聞)・長谷川清(水戸徳川家家令)とともに「水戸の三傑」と称されたという。

塙載は1877(明治10)年、屋敷内に煉瓦造二階建(写真)の建物を建てた。煉瓦造はイギリス積。当時、煉瓦造の建物など水戸には無く、客人を接待する応接間のような贅沢な造りで、塙載は「主信館」と命名していた。一階東側壁面にマンツルピースを設け、豪華な応接セットを置き、豹の剥製が飾られていたという。二階北側にはバルコニーが設置され、窓の上にはアーチ状の庇があった。屋根は当初瓦葺きであったが、改築後は金属性のスレート葺きの屋根になっていた。写真の右奥に水戸芸術館のシンボルタワーが写っている。タワーは高さ100mで、水戸市制100周年を記念して、1990(平成2)年に建てられたものである。筆者が煉瓦造探訪で2012(平成24)年水戸を訪問したが「主信館」を発見できなかった。すでに解体されていた。

(参照文献:茨城県の近代化遺産(建造物等)総合調査報告書 300頁)

文:八木司郎

東京産業遺産学会事務局

(注) 撮影者名のない写真は編集担当撮影

中川洋 〒116-0014 東京都墨田区 2-15-11-501号 (入・退会担当)

TEL: 03-5621-8307 e-mail: osam

久保健 〒309-002 茨城県水戸市 2-53-24 (編集担当)

TEL: 029-542-1100 e-mail: kudo0111

※本ニューズレターの著作権等は著作者にあります。利用される方は許諾を得たうえでお願いします。